



➔ G10 派遣者大学生によるワークショップ報告 (10月21日@東京大学本郷キャンパス)

「大学生とのディスカッション～G10 提言プレゼンテーションをより良いものとするために～」

10月21日(日)13時より、東京大学本郷キャンパス、情報学環オープンスタジオにて、G10 ボストン・ニューヨーク海外派遣研修 OBOG によるワークショップが開催されました。

これは平成29年卒業生で、第1回ボストン・ニューヨーク海外派遣研修生の一員であり、本校グローバル委員会の創設メンバーの一人であり、同委員会初代委員長でもある現東京大学2年生が中心となって、ボストン・ニューヨーク研修に派遣された日比谷高校出身の大学生たちによって開催されたものです。

主催者からは、ワークショップの主旨が話されました。「日比谷高校での海外派遣研修は、自分にとって大変大きなものであった。提言を作成するために学んだことを「点」にすることなく、大学生になっても継続的に考察していくことによって、成果をさらに大きいものになりたい。そのことについて、自分のためにも後輩のみなさんのためにもこういったワークショップを開催したいと考えたのです。」

イベントには G10 海外研修1、2期生 OBOG が7名が参加し、他にも東京大学、東京工業大学の学生が参加してくれた。今年の派遣生徒のプレゼンテーションを軸にして、ディスカッションが行われた。

グループ A は、エチオピアの食料危機について、食料の保存方法についての提言を行った。

提言についてさまざまな意見が出された。例えば、「食料をバッグのうなものに貯蔵するということがあるが、実際にどのくらいの期間で貯蔵が可能であるのか?」、「プレゼンテーションの中で、将来的に NGO や企業と提携していきたい、という内容があったが、現時点で想定している提携先はあるのか?」等、実効性についての質問について質問が相次いだ。渡米前にグループ自体がまさに自分たちに問いかけてきた内容であった。

グループ B は、マレーシアの肥満について、現地の学校に日本の給食制度を導入するという提言を行った。この提言についてもさまざまな意見が出た。「給食制度をビュッフェスタイルで行うということだが、日本のように定量を渡す方が有効ではないのか?」という問いかけがあった。これについては、グループ B から、マレーシアの宗教的背景から、食べられるものとそうではないものがあり、そういった状況においては、ビュッフェスタイルの方が有効である、という回答があった。

また、会場に偶然ではあるが、マレーシアから東京工業大学に留学している方が参加されていて、マレーシアの実情が語られた。マレーシアでは健康意識が低いという課題があり、食べ物についての知識も乏しいようである。彼自身も、日本では食品にカロリー数値が示されていることに驚いたそうである。

プレゼンテーションのフィードバックをいただいた後は、全体でこれらの提言を実質的なものにするために何が必要かをグループに分かれてディスカッションを行った。

グループ A について

- ・提言づくりで得たことを振り返り、記録しておくことが大事。
- ・ビジネスコンテストに参加することを考えてはみてはどうか。
- ・プロジェクトの一貫性がもう少し必要。不要な情報は削ぎ落として、フローチャートなどを作るなどして、もう少し明瞭さを。

グループ B について

- ・マレーシアからの留学生からの助言で、マレーシアで早期に食育を実施するなど他にも実効性のあるアプローチができるのではないかと。
- ・すでにあるマレーシアの施策をもっと調査するべきではないかと。
- ・外食や肥満などに対する価値観の相違についても考える必要がある。

今回の研修にあたって、開催場所を確保することができたのは、東京大学学際情報学府文化・人間情報学コースの方のご尽力が大きかったことを書き記しておきます。実は、氏とは、今年のボストン・ニューヨーク研修での UNIS での研修でお会いした縁で、今回のお願いに繋がりました。この場を借りて、お礼を述べたいと思います。

(参加生徒の感想)

G10のプレゼンはやはりレベルが違うなと思った。内容も素晴らしかったし、何よりプレゼンのやり方について話し方や資料の活用などたくさん学べることがあった。食料問題についてはもともとそんなに興味があった訳ではないが、プレゼンを聞きグループでフィードバックを行うことでより食料問題についての考えが深まった。

この研修は本当に楽しかったし、来年のG10ポストンニューヨーク研修への参加を強く望む私にとって、今後の刺激になるものでもあった。先輩方の考え抜かれた素晴らしいプレゼンを聞いたことで、来年のG10研修に行きたいという気持ちを高めることが出来、またそのプレゼンについてのディスカッションに、参加出来たことで、食料問題への関心を一層高められた。

学んだこと：・論文に必要なことは、「新規性、正確性、有効性」
・プレゼンでは、一目で流れがわかるスライドを用意する
・比較対象を用意する 今後 ・英語をもっと話せるようになる！
・特に国際問題に関しての講演会等に参加し、見聞を広める

今までは解決策が実際の問題の根本的解決に至らないのではないかと否定的な見方をしていたが、プレゼンの中の実現するプランや、大学生の意見を聞く中で、それが実現でき、小さくはあれどもそのような活動が積み重なって現状が良くなっていくのだと感じた。大学生と話す中で、大学生は自分がやりたい分野を学べ、人脈や時間があるため、プランを実行に移せてすごいと思った。

私の中で世界が広がるのを感じました。また、ディスカッションときくとついつい避け気味になってしまっていたのですが先輩方が進行してくださったおかげで自分の意見を述べることも出来、またそのアイデアを褒めていただいたりし、とても楽しくイベントに参加することが出来ました！今回のイベントで大学生の先輩方と関わり、未来の可能性ってなんて果てしないんだろうと思いました！

今日の話聞いてみて、何もできないことを知ることも必要だと知った。また、大学生の方々が実際に発展途上国に行って活動している話を聞いて、自ら積極的に行動すれば机上の空論ではないことがわかった。私も大学生になったら、サークルなどで支援活動に参加してみたい。大学の話も聞いて良かった。東大の方が、勉強だけがすべてではないということを大学に入ってから思ったとおっしゃっていたことが意外だった。

今回のディスカッションは、先輩方のプレゼンを聞き、大学生の先輩方と一緒にその内容について話し合うものだった。プレゼンは肥満問題や穀物問題をテーマにしたもので、グループでは主に食育の問題や、肥満に対する意識の違いについて話し合った。大学生の先輩方は実際に様々な国で食糧問題に関する活動をされている方だったので、様々な視点からみた意見をしていた。

(参加教員の感想)

今回の交流会は、Boston & NYプログラムの一期生の発案で、OB・OGの方たち主体で運営されていました。このように、これまでやっていなかったことを発案し、それを実現する力こそ、まさにG10の各プログラムが育成を目指しているグローバル・リーダーに求められる資質であり、卒業生は確実に育てているのだと感じました。(「グローバル・リーダー」とは何なのかは、人によって解釈は異なると思いますし違っていても良いと思っています。)

普段はあまり無い機会、大学や大学生について具体的にイメージをもてるきっかけになった、という人も多かったように見えました。人によっては内容以上に、何かについて「大学生と対話をした経験」自体が大きなものだったのではないのでしょうか。高校以降の生活にどれだけ想像をふくらませられるかは勉強のモチベーションとしても生きてくると思いますので、今後も学校内外を問わずチャンスを大事にしてください。

研修生OB、本年度の研修生、大学生、本校1年生が、それぞれの立場から自由に活発に意見を交わす様子が見られ、大変有意義な機会になったと思う。また、研修生OBによって自主的に企画、運営された交流会であったので、食料問題の提言をいかに実効性のあるものにし、どのように社会に還元するかなど、ディスカッションのトピックも新鮮であり、大学と高校をつなぐ場にもなった。こうした活動が、継続的に行われ、双方向性のあるものになると良いと思う。